

# ウッジ工科大学における初級向けシラバス

## —実践報告—

川瀬佐恵

### 0. はじめに

ウッジ工科大学では理工系大学の中では珍しく日本語講座が1984年より開催されている。単位認定課目でないにもかかわらず、10年以上もの歴史が続いているのは、テクノロジーの国・日本のイメージが強くなり、理工系で学ぶ学生達へ日本という国が自分の専門分野と重ねあわせてクローズアップされてきたのが大きいであろう。現在、当大学では100名近い学生が日本語を色々なレベルで学習しているが、約2年前から飛躍的に日本への関心が高まっている。特に、大学での英語の講師から聞いた話では、ビジネスイングリッシュのコースでは、日本人とのビジネストークではどんな表現が必要か、どんな日本人のバックグラウンドの知識が必要かなどという、具体的な授業も行っているという。日本語学習者の増加は、日本に対する関心が高まってきていると思われる。ただ、実際に日本語学習が彼らの専門分野に関する面で直接助けになるまでには、長い学習期間が必要であり、既習の外国語で十分な結果となる。色々な要素が交じって、日本への関心は高くなるものの、工科大学で日本語を単位認定科目にする動きが遅々として進まないのも現実である。

### 1. 学習者のバックグラウンドと彼らの動機

工科大学での日本語学習者の専門が理工系ということもあり、研究室での実験なども含め、自分の専門が非常に忙しい。その中で日本語学習を継続することはましてや単位外科目にもかかわらず、非常な努力を要する。日本語を学習したい学生は色々な動機を多岐にわたり持っている。日本の武道を志す者や、日本のアニメや漫画などに興味がある者、また日本伝統文化に興味がある者という様に、非常に動機がばらばらで統一性に欠ける。このようなコースでの最大の難点はシラバスになる。全ての学習者の動機づけが違っていると、ニーズも多様であり、どんな学習項目を優先して取り入れるかは頭を悩ませる問題であった。彼らの外国語学習能力は、理工系という専門を考えたとき、例えば専門書その学習言語で読むなどの実用性の高い学習に秀でており、彼らの語学能力は一様に高いといえる。しかし、日本語というヨーロッパ言語の中では特殊言語に入る日本語を学習するとき、彼らの知っている語学の実用レベルまで行くには予想よりも長い時間を必要とする。特に、一回90分の授業といっても、年間で50回前後であり、試験期間などの間があくことも考慮すると、全体の進度は非常に遅い。通常では考えられないスピードだが、一年目で「て形」まで進むことも難しい場合がある。また、こういったコースでは文字を省いてコミュニケーションに重点をおいた学習も考えられるが、学習動機にばらつきがあり、多くの学習者は文字への関心が高いため、それを省略もすることもできないという状況である。そこで次のようなシラバスを考えて、試行錯誤の中、過去2年間で実践してみた。

## 2. 日本語学習時の問題点

最初に具体的なシラバスを述べる前に、このような学習動機を持つ学習者の問題点を大きく六つに分けてあげておきたい。まず、文字の定着があまりよくない。漢字はエキゾチックを感じるのか好んで勉強する学習者が多いのだが、カタカナの定着は非常に悪い。また、各学習者の定着度の個人差が大きく出るのも初期の文字導入の時期である。第二に、先にも述べたように自分の専門が忙しく、継続して学習する学生が少ない。昨年の例をあげると、募集時 100 名近い学生がコースに登録し、一年後のコース終了時には 30 名前後になるという様に、学生の減り方が著しい。さらに、第三の問題点として、実質の学習時間が一年間のコースで週に 2 回 (1 回 90 分) 行っている、休みなどを含めると年間 75 時間程度になり、初級の前半のさらに半分くらいの時間数しかない。進度が遅いと、学習者の達成感も少なく、継続する学習者がさらに減るという悪循環である。第四は単位外科目であるため、欠席が多く、同じ一年目のグループ内でも学習者のレベル差が著しい。第五として、上記の学習動機からもわかるように、学習者のニーズが様々なのでそれを満たすような学習項目の優先事項を絞るのが難しい。そして、最後に六番目の問題点として学習言語の発話頻度である。海外の学習者にとって常に大きな問題点であるが、教師側の努力もなかなか実らず、授業に工夫が必要とされる部分である。そして、次項に続くシラバスは、以上の問題点をどのように解決できるか考慮しつつ試行錯誤の中で組み立て、過去 2 年間実践してみたシラバスである。

## 3. 工科大学に合うシラバス

まず、後に述べる細かい文型提出順序を決める重要なポイントとなった点を先に述べておこう。大前提は「必然性のある学習項目」である。文法シラバスだとすぐに使える文型が少なく、ただでさえ短い学習時間を有効に活用できない。そこで授業における教師と学習者の極めて使用頻度の高い文型を選び、初期の段階では文法にふれず必要な文だけを提出していた。その方法により、できるだけ直接法に近い形で導入を行い、学習言語を聞くチャンスが少ないのを補った。また、直説法に近い教授法をとることで、導入に母語の説明を加えず、類推力を養う練習を同時に持つことを目標とした。新しい言葉を状況やコンテキストで類推し理解することは、母語の語彙に似ているヨーロッパ言語を学んできた彼らにとって新鮮な体験だったようである。学習時間が少なく、進度が遅いのを補うために「必然性のある文型」を考えた際、「いかに少ない文型や学習項目で、いかに多くのことをコミュニケーションできるようになるか」が大きな目的となった。さらに、既習文型を使って、その次の新出文型や学習項目を学習言語で導入し、理解していけるかもシラバス組み立ての大きな方針となった。少ない学習項目で多くの発話を促し、既習語彙・文型を使った新出文型導入をし、さらに発話動機の高い文型項目を選び出すの容易ではなかったが、一年目の結果をもとに二年目でさらにシラバスを推敲していく形になった。また、シラバスにおける文型提出順序の関連性も第二の重要なポイントであり、それと関連して語彙導入での適切な選択も大きな課題であった。

#### 4. 具体的シラバス

前項で述べた「いかに少ない学習項目でいかにたくさんのコミュニケーション運用能力を伸ばすか」という点に重きをおくと、やはり「います・あります」などの存在文や名詞文などを初期に勉強しても、大きな動機づけにならないと考え、まず以下の二点に絞って、学習項目を決定した。一つは授業中における教師の発話の理解である。全て直接法でやるということではないにせよ、教師の発話頻度が多いものは、初めから文法抜きで提出して覚えさせれば特別な復習などをしなくても、毎回の授業が復習となりえるからである。「見て下さい・聞いて下さい」などの一般的なクラス用語だけでなく、自分の体についての病気の表現や簡単な天気の話など通常よりは多めに「**useful expression**」という形で毎回の授業で少しずつ提出していった。文型も新しい、語彙も新しいでは学習者の負担が大きく、一回の授業で導入・練習まで持って行くのは時間的にきつくなるため、既習語彙を使って新出文型の負担を軽くするよう配慮している。もう一つのポイントは「学習者の発話動機をどのように促すか」である。日本語を使って話すには、「話す」という行為の動機づけが日本語使用の前にあり、それを考えた場合、「自分」について話せる文型を初期にたくさん導入する方が、学習者の発話が増えると考えた。語彙はその後に学習する文型で頻度の高くないものは提出せず頻度の高い言葉を選択したり、母語のポーランドでどんな発話表現が多いかを観察し、自分の言いたいことを言えるような日本語の語彙を導入して、学生の自主的な発話を促すよう努力した。

以上のようなポイントをふまえて、学習一年目のシラバスは大きく分けて以下の四つの部分に大別した。シラバスにも場面・機能・文法・話題などと多岐に及ぶが、学習者の動機とニーズによって色々な機関で採用されるシラバスがあると思われる。最近はコミュニカティブ・アプローチの浸透によって各シラバスをバランスよく取り入れたものが使われることが多いと思うが、下記のシラバスも例外にもれず色々なシラバスをちょっとなんか加味した形で行っている。

①数字・家族名称・助数詞・曜日と日付・天気など日常頻度の高い表現

②自己紹介シリーズ

Nがすき・きらいです。

Nがいます・あります。(所有)

Nがほしいです。

Nができます。

(どんなNが……か。)(疑問文)

③形容詞文

④動詞文(ます形のみ)

下記に示すシラバスの表の(1)の文字導入は次に続く学習項目と並行しながら行い、さらに今後の文型で必要になる名詞を少しずつ提出した。また、(10)の形容詞導入も過去の経験から一度に大量に提出しても定着が難しいため、初期の段階から「眠い・難しい・大きい」などの頻度の高い形容詞を少しずつ提出している。

1999/2000 年度 初級 I シラバス

	学習項目	文型・その他
1	文字導入 (ひらがな)	今後、使用頻度の高い名詞を約 80 提出。
2	挨拶と自己紹介	NはNです。
3	クラス用語	みてください・きいてくださいなど基本的な表現
4	数字 (1~100)	
5	感謝の表現	ありがとう・どうも・どういたしまして
6	謝罪の表現	ごめんなさい・すみません
7	時間の表現	〇時です。〇時半です。何時ですか。
8	数字 (100~10000) 買い物会話	Nをください いくらですか。
9	助数詞 (一つ・二つ)	いくつですか。
10	い形容詞	NはAです。
11	家族名称	ウチとソトの表現を両方導入
12	人の助数詞 (一人・二人)	何人ですか。
13	年令の表現	何歳ですか。
14	仕事の名称	お父さんのお仕事は何ですか。
15	好きです・きれいです。	Nが好きです。Nがきれいです。 (大好きなどのバリエーション含む)
16	名詞否定文	NはNではありません。
17	曜日と日付の表現	何曜日ですか。何日ですか。何月ですか。
18	名詞文過去形	NはNでした
19	どんなN	好き・きれいと関連して導入
20	Nがあります・います	所有文・頻度の副詞 (少し・たくさん・あまり・全然)
21	ほしいです	Nがほしいです。ほしくないです。
22	カタカナ導入	カタカナの語彙を約 70 提出
23	こそあ	これはNです。 この・その・あの ここ・そこ・あそこ こちら・そちら・あちら 質問文 (何ですか・どこですか・誰ですか)
24	体の名称と病気の表現	Nが痛いです。痛くないです。 N (熱) があります。
25	できます	Nができます・できません
26	誰の・何の・どこの	NのNです。
27	動詞導入	ます形のみで過去形含む
28	助詞	何で・誰と・どこで・どこへ・何を
29	頻度の副詞	いつも・よく・ときどき・あまり・全然
30	たい形	Vたい・Vたくない
31	誘う表現	Vませんか・Vましょう
32	もう・まだ	もうVましたか。いいえ、まだです
33	授受動詞	あげます・もらいます

以上が昨年の学期で実践したシラバスだが、完成度は低く問題点も多い。

## 5. このシラバスにおける問題点

市販の教科書にとらわれないシラバスを実践した結果、次のような問題点にぶつかった。まず、発話を促すためのシラバスに絞っているため、授業中でのパターンプラクティスの形式をとった練習があまりとれず、コミュニケーションを目的した練習形態が多くなった。インタビューやインフォメーションギャップを使ったアクティビティーや簡単な会話のロールプレイが中心となる教室活動では、完全な定着やその後の応用にまで至らない場合がある。本当は、口頭でのリピート練習なども含めないと、その後の定着の度合いが低くなりあまり良い結果を促すことにはならなかった。また、目標としている「提出順序の関連性」があまりなく、さらに動詞の提出が非常に遅くなってしまった。そのため二年目の学習者にとり、「て形・ない形・た形」などの動詞の活用が中心となってしまい、学習者の負担が重かったように見受けられた。さらに、一年目でいかに少ない文型と語彙で発話を多くするかに重点をおいていたため、学習者の発話意欲は高いが、二年目で複雑な文型が増えても以前の簡単な文型で代用して発話をしてしまうという現象が多かった。必然性のある文型を取り入れたために、コソアドや存在文に発話の必然性を感じず、教室活動にもあまり意欲を見せず定着もあまりよくなかった。自作教材のみで授業を進めていくため、意欲の高い学生に独習用の教材をわたしたくても、提出順序が全く異なるため市販の教材を紹介できないというジレンマもあった。このように、二年間にわたって実践してみたシラバスだが、二年目で多少の改善を加え、順序をもう一度見直したとはいえ、やはり一つの教科書に沿って学習する方が完成されたシラバスで学習効率もいいのではないかという大きな疑問が常に残る形になってしまった。

## 6. おわりに ～今後の課題～

以上のようなシラバスを実践したが、実際にこれで学習効果がどこまで引き出されているかの判断は難しい。ウッジ工科大学では担当する日本語講師が青年海外協力隊からの派遣で一名のみという状況で、人材不足もさることながら、現状では外部からの意見もなく授業の精度や向上を目指すことが難しい。市販教材にとらわれない文型提出は学生のニーズや学習背景などを考慮する必要性が高く、時間のかかる作業でもある。コミュニケーション能力の習得に重点を置くシラバスの模索は、進度の遅い学習状況・学習目的の高くない学生の中では適切でないときもある。だが、特に理系の学生には「言語は手段である」という考え方が一般的であり、いわゆる文系の学生とは違ったアプローチが必要である。論理的な思考を持つ彼らには構造シラバスを用いて、文法をシステムティックに提出する方が習得は早いかもしれない。だが、少ない学習時間では目標を絞ったシラバスが必要であり、「意味」のない導入は避けなければならない。やはり、現状よりも更にコミュニケーション能力に効果的なアプローチを実践していくことが必要だと考える。工科大学の学習者には日本語を語学として習得を楽しむというよりは、習得の後のステップを考え、いかに実践で使用できるかという観点で外国語を学習している姿勢が伺える。そのような要素を考え、今後もさらに精度の高いシラバスで工科大学に合う学習形態を考えていく必要があると思われる。